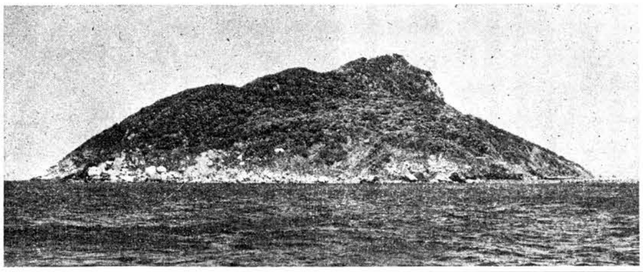
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市博多区東公園二一－三二（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一－九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三六一－三四一（代）～四番
三六一－三四・六〇六番

神島〝沖ノ島〟



三笠宮殿下御歌
沖ノ島森のしげみの岩かげに
千歳ふりにし神祭りのあと

沖津宮現地大祭荘厳に行わる
―日本海々戦記念日を卜して―

沖津宮現地大祭は五月二十七日玄界洋上遥か五十粁の遠沖に浮かぶ沖ノ島に渡島、厳かに祭典が斎行された。

この現地大祭は、明治三十八年の日本海々戦の勝利を記念して行われるもので、当日にかぎり全国より参拝者を募り海上保安庁より巡視船の供与をうけて、年にただ一度だけ執行していたものであるが、近年、海上保安庁より燃料事情が窮迫し、又、警備救難等の本来の業務にも支障を来たす恐れがあるという旨の通達があり、取りあえず灯台見廻船「げんうん」の供与を受ける事となった。しかしながら定員が僅か十五名に限定された為に、一般の公募を取止め、昨年時化のために渡島出来なかった為、信者のみにしたので、例年に比較して多少寂しい気もした。

それでも、特に出光興産株式会社々長大和勝氏を始め遠く岩手県等からも参拝された。

二十六日、午后六時、中津宮本殿にて宵宮祭斎行。明日の天気と渡航の安全の祈りが捧げられ、一般参拝者は照海殿に参籠された。

二十七日、午前五時三十分、朝霧の深い大島波止場に着岸の「げんうん」に全員乗船、此の日は、特に天祐を得てか、さしも荒波の玄界灘も、海上平穏、天気晴朗、絶好の日和に恵まれて、定刻午前六時、すべるように「げんうん」は大島港を出航、一路沖ノ島に向った。又、沖中両宮奉賛会の供奉員を乗せた大島漁船伸洋丸も、「国家鎮護」の大幟をさしたて、大漁旗をなびかせてこれに従った。

約三時間の航海を経て海の正倉院と称せられ、神秘なたたずまいを見せる神島「沖ノ島」に着島。

直ちに、初夏とはいえ、未だ真冬を思わせるような冷い海に肩までつかり「海水禊」を行い心身の罪穢を祓清めて島の中腹にある御本殿に向った。千古不斧のうっそうたる原始林にかこまれた数百階の石段の参道を上り、巨巌屹立する中に鎮座される沖津宮御本殿に着く。

午前十時。沖津宮大祭斎行。修祓に続いて皇室の御安泰と国家の繁栄。航海安全を祈念して葦津宮司の朗々たる祝詞は深閑とした神域の静寂にこだました。続いて沖中両宮奉賛会長、大島漁業協同組合長、参拝団を代表して出光興産株式会社々長大和勝氏等による玉串奉奠が行われた。

祭典終了後、社務所前の中央突堤の上にゴザを敷き直会を行い、沖の島出漁仲間より御供えされた新鮮な鯛や鰤のおさがりを全員頂戴した。

本年は幸い天候に恵まれ二年ぶりに渡島が叶い滞りなく大祭を終え、参拝者共々神恩に感謝しつつ喜びを分ちあった。

論説

雲上神話と史上神道（下）
―女子大生レポート―

D、神仏習合思想の発展

中古史に於ける五百五十年間の宗教変遷が、神話から現実の歴史的神道への発展であるが、神話に見る純粋固有の民族思想は、仏教　教の刺戟影響があって成長したものである。殊に奈良朝では長らく天然的概念を以て天神地祇を拝し、神霊の冥護を信じていた。然し、社会の複雑化と智力の要求がこれに満足しないで、一層高尚な宗教道徳の基礎を得ようとしていた。是に於て、先づ儒教の五倫五常はよく実践道徳上の欠点を補ったが、宗教の真面目さを発揮するには足らず、遂に上古史の末葉印度から支那三韓を経て渡来した仏教の光明が、朝野の宗教的教養を成立させたのである。神道は神話の雲上から、歴史の地上に確固たる現実的生成的基盤を定めたと見ることが出来よう。

中古史の変遷は、その形勢によって三期に区別する事が出来る。第一、三教融和期とはわが国固有の自然祭神思想と支那渡来の儒教に触発させられたものである。（中略）第二、古京宗昌隆期とは政治上の力を借りて仏教を国教的地位に立たせようとしたものである。特に奈良朝のわが国美術史上最も強い宗教的感化は見逃せない。第三、台密最盛期とは桓武天皇の平安遷都より中古末に至るまで、仏教の中で天台宗と真言密教とが最も隆盛を極めた時期とする。この間は藤原氏が摂関となって勢力があったが、仏教は朝廷及び藤原氏の崇敬により漸く上下一般に行われ、外観の壮大な天皇の威権を抑える事が出来なくなり、宮廷的僧侶的弊害も又甚だしく、終に鎌倉時代に至って新宗教が開かれる事となった。

然し、神祇制度の規定とその後の変遷過程に於ては、常に神祇官を太政官の上においた。民族感情ともいうべき神祇崇敬の優位は、決して隆盛を極めた仏教にも破れることはなかった。（以下略）

E、神話と叙事詩

神話と文学との関連を古事記によって述べてみよう。イザナギの命は、多くの神々を生んだが、最後の三人の子の中に天照大神があった。天照大神はもとの名は大ヒルメ、つまり日の神に仕える巫女であったが、やがて日神そのものとなり天照大神という理念的名称を与えるに至った。

神話は歴史ではなく、そもそもは作り話である。作り話によって古代の叙事詩が生み出される土台となった。人間の経験や智恵が、原始時代の呪術的な祭式の枠をはみ出して行こうとする時代の緊張が、神話の飛躍する機会を与えた。自然の圧力に打勝とうとして、人間は呪術的な祭を実践し、自己の希求を自然に押しつけようとした。しかしそこに於ける人間の力はまだ弱く、崇拝される神々には名前もなく個性もなかったが、やがて神々は次第に人間化され個性化され、古い神々の持っていたような自然的要素を剥ぎ取られた姿で現われてきた。（中略）

古事記には多くの歌謡が入っている。文学的立場で見るならば理念ではなく、生活に就かねばならぬことである。やはり追及して見ると、生活の混濁が息づいていると思う。多くは素朴な恋愛歌だが、農耕や狩猟にふれたものもあり、生活に対しての味がある様に思える。（以下略）

以上ごく少数の所論を載せたのであるが、神話教育の是非論数篇は別として概して読んだ参考文献の主張に引きずられた観がある。中には遂に自身の主張など片鱗もなく、完全に所論の目標を見失ったかと思われるのもあった。

神話教育論は、学生も堂々意見を述べて屈託はないが、前年取り上げたことがあるので今回は触れない。記紀等の所謂日本神話は、学問的対象として普遍性があるので詮議の材料とされるが、地方に伝わる神話伝説に興味を持ち、その顕彰保存に努めたいという意見もあった。それが出生地や居住地の郷土的民話の場合、親近感もあって捨て難い点理解できる。

特異の検討を盛った所論として、現代神道の概観があったが、神道論というよりも神社経営問題や神職批判に及んで、かなり痛烈に筆誅を加えた心算の一篇もあった。神職の家庭か、神職と親談の機会を得易いのか、神社本庁の機能まで知っている。学生としての批判が行き過ぎたのは感心できない。ともあれ、興味のなさそうな命題にもかかわらず、一般にまじめに考察する態度は良い。

昭和五十二年度　夏越祭・大祓神事御案内

拝　啓

暑さも日毎に厳しさを増してまいりました。

さて恒例の夏越祭が近まってまいりました。この祭りは大祓神事を中心に行なわれ心身の罪穢を人形に托して祓い除き、清々しい気持をもって明日の生活を安らかにするための祈りをこめた祭であります。

本年も左記により斎行致しますので皆様お誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

敬　具

六月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

特別崇敬者各位

記

一、七月三十一日　午後五時　大祓神事　引続き夏越祭

◇

写真の人形は当大社、神宝滑石製人形で去る昭和四十五年の沖ノ島調査により発見され、当社神事の伝統と精神の深さをたどる上に極めて貴重なものであります。各位宛御送付したのはこの人形をかたどったものであり、赤白は男女の区別を表わしたものであります。男は白、女は赤に氏名、年令を書き、息を吹きかけ一夜枕の下に敷き、初穂料をそえられ七月三十一日までに到着するよう御返送下さい。

阿蒙少言

目まぐるしく変化する当今の情勢を生きる為に、一箇の信条を是非とも護持せよと説く教団指導者がある。不動の信念にまで鍛練させる努力も結構である。その信条は団体の場合には綱領となる●されど第三者一般に容易に受け入れられないような特異な信条は、多くの疑点を引き出す。あの太平洋戦争は、次に述べる偉大なる目的を達成したい国家的悲願が、同胞幾百万の血を流させ尊い犠牲を献げさせたのだ。曰く「被圧迫民族救済」曰く「人種差別打破」曰く「建国理想実現」と●信条の内容はスローガン的表現としては一応結構であっても、大多数の国民がましてや少くとも東亜の弱小民族が、肯定しかねる念仏調は禁物である。嘘と言われても仕方がない。聖戦とか女好とか、古典の八紘一宇とかは、今は何とも通用し難い。国際的にも複雑化を増す政治経済を思えば、独善的に過去を飾り未来を夢みるなど愚にひとしい●それかといって、自己無頓着、拝外追従に堕しても困る。足元を凝視して良い点を助長し、他の学ぶべき美点を消化してゆきたい●敗戦はさまざまの悲曲を奏でたが、一面、神の妙音を知らせてくれた。国民は歴史的迷蒙や民族的独善を捨てたが、まだ己惚れも残存する。復活の非も見える。酒は飲んでよいが、黒田武士は出てきてはよくない●神は偽りを教えてはいない。だから歴史の真実、人間の本質を歪めがねで見てはならない。我独り尊し、我最も優れたりなど空疎な飾り文句を列べては、世界の友好も民族の共存も成り立たない。一部の教団にこの傾向が芽を吹いた観があるが、現実無視のお笑い草である●毛沢東に限らず世界は将来一つになると考える人は多い。早い話が、日常の食事でさえ、和洋併列が和洋綜合の一色化になってきた。

（白雲）

第一九一回　宗像大社歌会詠草
毎月一日〆切　詠草到着順

福岡　桜井ツ子
土器のごとき日があり黄沙ふる防風林の上暮れむとしつつ

八幡　安川浄生
赤き実の散り溜りたる山道に人に告げ得ぬ連想一つ

武丸　原田イノ
命あらば又来て写経せむ願ひたてたり大和の薬師如来に

福岡　吉田信夫
宮島の宿の出で湯は窓ひろく瀬戸の灯きらめきそむる

武丸　原田美代
春かすみ棚引く田地向ふ山片方の学生寮もしづけき

田熊　今村重刀
つつじ咲く森林公園より見はるかす筑後平野の果はかすめり

曲　天野トモヱ
妹と折よく会ひしお地蔵のみ堂にしばらく話しこみたり

田久　立花勇雄
梅雨の晴れ間村の辻より間をおきて浅利貝売りの声透りくる

宮田　片山一
背なに陽を享けて歩めば乱れたる影の形が地に踊りゆく

戸畑　田中ハツセ
ナポリ湾の朱の貝に彫る指先にカメオ細工の美女が生れたり

武丸　立石昇
五月晴れに友の寓居をこと訪へば玄関側のさんご樹のかゞやき

福間　廣渡一寸毛
皇国の興廃賭けし海戦の当時の幼児吾八十となり
（五月二十七日に偲ぶ）

田久　小方実
厳しかる世とうらはらに老い姉の入園許可の電話かかり来

津屋崎　浜津鴻浪
首すじに雪降る如く切なかり逢う度小さくなり給ふ母

田熊　吉田直志
細波のなぎさに若布ひろい居る乙女の素足真白く光る

福間　松尾豊
難聴の兆せし頃より片耳を塞ぎて物聴く癖を持ちたり

津屋崎　占部由久
芍薬の華麗に咲きぬ小庭べの他の花圧したわゝに咲けり

池田　永富臻
りんとたつ緑葉の濃き水仙の真白き花は雪に堪えゐつ

原町　八波五月
岸遠く藍一色の湖跨ぐ勢田の唐橋近江大橋

田熊　鷲津かつ代
吹きしきる風に日すがら揺れやまず危ふくたもつひなげしの紅

吉武　白木うめの
雨の来ぬ間に畑草とるわれを嬰はむとめぐるぶよ執念ぬき

武丸　立石ろせ乃
うつろなる目にわれを見る能面の煤光りして鴨居にかかる

深田　中野節子
雨の日は農家廻りに良しという集金人のヘルメットより雨雫くする

徳重　石松や寿子
とりどりの躑躅は庭に咲きみてど夏柑の花いくばくもなし

田島　楠理
菊穂差し二十日になれど未だ少し四号鉢の準備終れど

宗像　中村幸
早春を気付かずをりし路のとう伸びきりたるが淡き花つく

田島　吉武武雄
呑むなよと車呼び止め塩丼かけ胸なでおろす朝のひととき

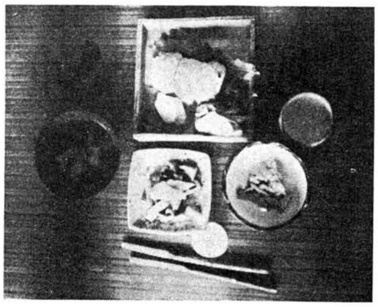
田熊　力丸一郎
陶芸に学びし老妻の作品は手あと残して永久に消えなん

名残　竹原圓
昨日のことが思いうかばず我が老いの日誌はまたも余白となりぬ

宮田　北原君子
バイパスの下道通れば人気なきままに群なす鳩の棲みつく

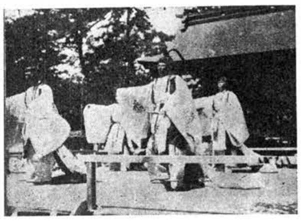
初夏を告げる 皐月祭斎行

　風薫る、五月五日午前十時、恒例の皐月祭（さつきまつり）が雨天の為、当大社五月寮に於いて遥拝式で執り行なわれた。
　皐月祭は例年、浜宮（はまみや＝神湊段天区）、五月宮（さつきぐう＝江口区）の両宮に於いて斎行されているが今年は雨天の為、五月宮に近い五月寮で行なわれた当日、早朝より同所に祭壇を設け神饌として、古式に則り赤飯、菖蒲酒、粽（ちまき）、海川山野の季節物を供え、斎主葦津宮司以下神職四名奉仕のもと氏子会長中村清之氏外総代多数並に浜宮、五月宮氏子の田中綱人段天区長、辻野平江口区長、子供会代表をはじめ両宮氏子関係者多数参列厳粛に行なわれた。
　祭典終了後同所に於いて直会が盛大に行なわれた。慣例により方五寸の折敷に栖の若葉を置き、その上に赤飯の握飯、粽、ガメ煮等を盛付、手作りの栗の木箸で食し、菖蒲酒を酌み交し和気藹々の内に終了散会した。
　当大社の皐月祭は、古くは秋の放生会に対し、五月会（さつきえ）と呼ばれ盛大な祭儀が営まれていた。その内容は五社の神輿（みこし）＝（第一宮、第二宮、第三宮、織幡宮、許斐宮）が辺津宮本殿東参道の釣川岸（現在の万葉歌碑の辺りが入江になっていた）より江口の浜まで御座船を仕立、神幸式を行い、川口の五月の浮殿に於いて浜下りの祓の神事が行われていた。
　この故事を今に伝え毎年釣川を狭んで対する浜宮、五月宮に於いて当大社と両宮の氏子住民挙げての祭典を行っているのである。
　又、この皐月祭は古くは、農耕儀礼の祭として始まったが時代の変遷と共に、ある時は諸氏の集合する大神事となり、ある時はわずかな氏人によって祭儀が営まれたこともあった。しかし祭の精神はその中に脈々と受けつがれてきた。
　毎年この日が近づけば両宮の氏子住民、子供達が集い、境内を掃き清めて神事を迎える準備をする。丁度この五月五日は端午の節句、子供の日として祝祭日に定められ当大社の皐月祭も近年では子供達の参列も次第に多く、特に浜宮に於いては境内に特設相撲場を設け子供相撲大会を開催している。



主基地方風俗舞保存会 結成準備委員会開催

　当社春秋の大祭に田島区青年団によって奉納される主基地方風俗舞は、昭和三年今上陛下御即位の大礼を挙げさせらるるに際し、福岡県が主基地方の御治定の光栄に浴したが、その際に主基地方風俗舞歌舞として大嘗祭大饗宴に於て行われた舞で、昭和四年主基地方記念会が設けられたのを機会に宮内省より当時特に宗像大社に下賜せられたものである。
　しかし、太平洋戦争勃発、そして終戦とめまぐるしい世相の移り変りと共に絶えていた主基地方風俗舞は、昭和二十八年関係者の協力を得て復活協議会が設立され、十月放生会には戦後初の主基地方風俗舞が大社神前に厳かによみがえった。
　爾来地元青年団の協力を得て今日迄伝承保存がなされた。
　昨年十一月には風俗舞新旧の舞員の懇親会を催したが、五十余名の舞員が出席、この折り、主基地方風俗舞を後世に伝承していくには保存会を結成しなければとの気運が高まり、準備委員会を設け種々規約等の検討がなされている。



参音聲
千早振高良の山のかうごいしかけじくづれじ御代にならひて

破
うちわたす生の松原いきいきと栄えむ御代の色ぞ見えたる

急
君が代はよきことのみを企救の浜いのち長きがうれしかりけり

退出音聲
早鞆の宮のはふりがかるといふめでたき御代にあへる我かな

【授与品紹介】 宗像大社由緒記

　今度、当大社由緒記が装いも新たに再版されました。B五版、三十六ページで、表紙は玄海灘の紺碧の海に浮ぶ沖ノ島全影写真を配し、内容は由緒略記、境内を始め、沖・中・辺津宮の社殿、宝物等掲載可能なかぎり集録されています。
　配布希望者の方々には社頭にて一部五〇〇円にて授与致します。

第二十二回 宗像大社中津宮七夕揮毫会 開催要項決定

　第二十二回、宗像大中社津宮七夕揮毫会（主催＝当大社中津宮・大島村教育委員会・夕刊フクニチ新聞社）の開催要項が左記の通り決定致しました。

◇要項◇

一、応募資格　幼稚園々児・小学校児童・中学校生徒
一、課題
　幼・小学校
　幼・一年　いけ
　二年　ひまわり
　三年　宮まいり
　四年　山上の星
　五年　登る参道
　六年　書の神様
　中学校
　一年　海洋白雲
　二年　万古清風
　三年　山姿雄大
一、規程　①字詰行数は随意
　②和半紙（普通型）を使用。（規格半紙は不可）
　③学年、氏名は自書のこと。
　④各学校、塾とも名簿三部提出のこと。
一、申込み　六月三十日（木曜日）まで
一、届先　宗像郡大島村　宗像大社中津宮七夕揮毫会係
一、席上揮毫　七月二十一日（木曜日）
　◎受付時刻、開始時刻、便船の発着時刻等は後日通知します。
　◎荒天にて便船欠航の折は会場を変更します。
一、会場　小学校四年以下　大島小学校・五年以上中学校　大島中学校
一、参加料　二〇〇円　六月三十日申込みと同時に納付
一、審査　当日、中津宮にて厳正審査の上、発表します。
一、表賞式　当日、午後四時から中津宮にて行います。

馬の脚の停年

残筆しがらみ草紙　玄陽隠士 (6)

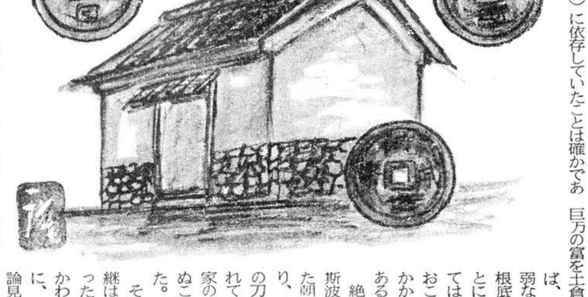
　老兵とする年齢に達すると、職を退く。この頃しきりに定年退職と書いて組合内部でなく関係ない外部に、不満不当を訴える傾向が強くなった。年齢と健康状態や能力低減は、人によって千差万別だろうが、それを測る機械はないから一様に取扱う。やむを得ない。不当の訴も出てくる。
　或る会社の硝子窓に外部の人に訴える貼紙を見る。それに一応の理屈があることを含味させる「社長は六十七才、男盛り花ざかり、五十五才の社員はおいぼれ、定年退職の宣告下る」こんな皮肉の文字が列べてあった。
　ぼろ切れ扱いの追払いと、花ざかりの全盛期との対照に、人種的差別でもしているような印象が浮ぶ。大企業の社長や重役に五十五才引退をあてはめたら、現状では幹部は一人も居なくなる。
　昔は七十才の当主は、商店にも農村にも滅多に居なかった。働く体力能力はあっても後継者に譲って、脇役をやったり引籠ったりが常識であった。今は男盛りの八十才以上の社長も珍しくはない。中には九十才の声も聞く。平社員の強制退職に比べると人種が違うかのような錯覚もある。
　これを役者の殿様芸と、馬の脚の端役に移して考えると、男盛りと老いぼれの理屈が至当の顔を出す。馬装をかぶって舞台を踏む二人の脚は、老人ではやれぬ若い者の芸で、難しい台詞も身振りもいらない。その馬にまたがった殿様は勿論舞台の主役で、大根役者では勤まらない芸を知っていなければならない。
　主役の殿様役者は、勇壮に若く塗っていても、その道の修練経験を積んだ老齢が多い。馬の脚にその必要はないが、若くて馬上の役者を支える体力は是非とも必要である。
　馬の脚に譬えては一般の平社員に失礼になろうが、公務員を役所で見た経験では、その通りとうなづきたくなる馬の脚も少くない。十年一日の如く、きまり切った仕事を重ねて老い込むと、要領よく立ち廻って仕事の内容は甚だ乏しい連中も見かけられる。
　市役所や県庁の課長の話に、人数が多くなり分担が細分される傾向が強いが、成果は甚だ弱い。真に燃心に能率的に事務を処理するなら、三分の一でやれるほど頭数が多過ぎる。特に年長者はうるさくて扱いにくい点がいやになる。と所見が語られたことがある。
　やはり馬の脚の役者は、殿様役者より早く交替を必要とするが、現代はその生活保障が要望されてきて、食うための職場であり労働である以上、能率向上とか合理化とかは第二次的問題であるとする。では、馬の脚はやめても殿様をやらるわけにゆかぬなら、何かの端役にはいつまでも置かねばならないことになる。脚はくたびれても、食わねばならない。
　然し、その大切な食うための職場は、大切にしなければならない筈である。それを赤字がふえようと、倒産に追い込まれようと、自分たちの責任ではない知ったことではない、殿様らの責任で、見殺しにはさせぬ食うための保障を怠るなどは、その人間的にはいやな極端さを見せつける感がある。労使がそれぞれの立場で切離された考え方に走ってはなるまい。
　ストだ闘争だと挑戦的な風潮が、外部の賛成を求める窓硝子の貼紙を作る。貼紙に対決姿勢を表現するのは、ぎりぎりのやむにやまれぬ窮極事情のある場合に限らねばならない。安易に六十七才花ざかりを出して、自分たちだけが五十五才を泣いているかのような戦法は低劣であろう。
　下手な殿様芸で馬の脚以下の無能も居る。何ら苦労を知らず、お家柄に生れただけか、先代が企業体に尽した功のおかげか、幹部の座に在りついている場合は、床の間の飾り同様に芸はない。それでは馬の脚も腹の中で笑う。
　無能で過ぎれば毒にならないが、蔭で悪趣味の虜になって企業の金を食うとなれば六十七才は邪魔物である。企業体も繁栄どころか存立を危くする例は世上によく見られる。そこに馬の脚の厳しい批判があり不平がある。
　前世紀の資本家型は、現代存在すまい。マルクス・レーニン主義の反逆はなくても、搾取型経営者は影を没した筈である。将来は殿様役にも、馬の脚役の修練が求められるであろう。そうすべき時代が来るだろう。

こうのみなと 神湊 (69)

楠早鳥作　福田長庵画

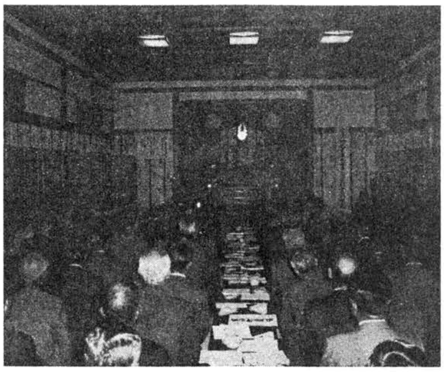
絶海中津（その三）

　〈何故、刀剣を買いあさるのか〉絶海は考えぬいた。戦のためか、しかし戦乱は終りを告げようとしている。
　その頃、山口の大内義弘は、明継からもたらされる情報を次々に分析して、九州の大友、島津、少弐等の有力守護と益々親交を深めた。これにより九州探題との離間を策した。この結果彼等は幕府との交渉は凡て九州探題を通りこして管領斯波義将と直接おこなった。細川頼之という強力な後楯を失った貞世は孤独の中にその政治的生命を衰弱させていった。絶海はこの機を逃さず義将と計り、貞世の追いおとしにかかった。
　応永二年秋、ついに今川貞世は九州探題の職をおわれた。
　貞世の失脚した年の十二月、義弘は早くも使者を入鮮させ土物を太祖に贈り、修好を求めた。義弘と李朝朝鮮との交通はこれが最初である。
　絶海は貞世の後任として義将の女婿にあたる渋川満頼を探題に推挙した。その器量は遠く貞世に及ばぬことは解っていたが、大内を筆頭とする西国大名との間の均衡を保つには、まず無難な人事であった。
　絶海は大内義弘の領国経営にはことの外関心をもった。対外交易によって入る莫大な利益をどのように使っているか、凡ての情報は山口の都市造りに費消されていると言う。
　管領が細川頼之から斯波義将に替った頃、鎌倉時代以来政所の執事（長官）をつとめてきた二階堂氏にかわって、足利氏譜代の家臣で、義満の腹臣の部下であった伊勢氏（貞継）が政所執事に就任し以後代々伊勢氏がこの職を世襲するようになった。将軍家と特殊な関係にあり、側近の役をつとめた伊勢氏による幕府財政機構の掌握は、幕府財政にいよいよ私的な要素を強くもちこむこととなった。
　この頃、朝鮮使の通訳として日本に来た伊仁甫は、当時の幕府財政のあり方をみて
「国に府庫なし、ただ富人をして支待せしむ」
と報告している。ここからみて、幕府財政は特定の有徳人（富有者）に依存していたことは確かであろう。幕府財政が将軍家の側近によって私物化され、政所が公的性格を失いつつある状況は絶海も憂慮していた。
　〈大内が土倉と結びついています〉阿斎がもたらした報告は絶海を恐愕させた。
　土倉とは、鎌倉、室町時代におきた高利貸業者で、とくに質物を保管するために堅固な土塗りの倉庫を造ったものを土倉、土蔵とよんだのがおこりであった。室町時代も義満の頃には京都に三五〇軒、奈良に二〇〇軒、近江坂本に三〇軒というように多数の土倉が輩出しているが、その他、全国有力な市町や港町には、ほとんど例外なしに土倉が居住して庶民の金融機関となっていた。
　また幕府はこれを有力な財源の一つとして目をつけ年々巨額の賦税を課していた。土倉のなかでも有力なものは、幕府の納銭や禁裏の御倉職に任命され財政上の実権を握っていた。一方、庶民への高利貸を盛んに行ったため屢々土一揆の攻撃目標になることがあった。
　大内家が対外交易によって得た巨万の富を土倉の経営につぎこめば、それでなくても脆弱な幕府の財政基盤を根底からくつがえすことになる。これがひいては社会不安を喚びおこし、幕府の存亡にかかわることは必定である。
　絶海はそう判断し、斯波義将に計った。また朝鮮使の報告により、彼地に於ては日本の刀剣が高額で商いされているのを知り大内家の政策の油断のならぬことを改めて認識した。
　それより一月后、明継は再び義将の館に入った。前回とは打ってかわった鄭重な扱いに、明継は、弥太の目論見が適中したことを肌で感じた。幕府を圧迫するのは、財力でなければ駄目だと言う弥太の持論を、明継がとりあげたのがこの結果となってあらわれたのである。
　座に着くと絶海が、この前会った折に作ったものだが後が続かぬと前置きをして詩篇を明継の前に置いた。黙読して明継は筆をとりその後に記した。
　朝来偶々晴簷に向って嘆ぐは此の日
　行人は帰るか未だ帰らざるか



!!「神郡宗像」は一つ 郡内五農協合併いよいよ実現!!

―当大社神前に於いて合併仮調印並奉告祭斎行―



宗像郡内五農協＝玄海町・宗像町・福間町・津屋崎町・大島村＝の合併仮調印式並奉告祭が去る、五月十七日午前十時より当大社清明殿（結婚式場）神前に於いて厳粛に斎行された。

同式典には、五農協組合長＝深田稔（玄海）・花田隆（宗像）・上田千吉（福間）・川端寿治（津屋崎）・山口節郎（大島）＝以下五農協の役員（理事・監事）・幹部職員等一〇〇余名参列、来賓の郡内五ケ町村長・議会議長、福岡県農政部、県農協中央会代表等多数列席のもと神前に、合併報告並に今後の事業拡大発展繁栄の祝詞奏上の後、五農協長玉串奉奠、来賓各代表玉串奉奠を行い式次第も滞りなく終了した。

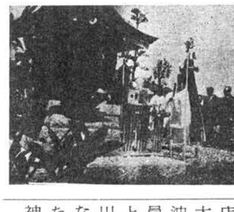
郡内五農協の合併構想は昭和四十九年、「宗像地区は北九州と福岡の大都市圏の中間に位置し急速に都市化が進み、農業経営の多様化、組合員の質的変化等、農協基盤は大きく変ぼうし、他方、流通の大型化、市場条件の変化等により企業との経済競争は増々激しくなっている。この情勢の中で農協が組合員の多様化、高度化した営業、生活面の要求と期待に応えるためには、合併によって、組織及び経営基盤の強化を図る必要がある。このため宗像地区の五農協は広域合併を実現し、事業体制の整備強化を図り、高率的な運営を行い、組合員の営農と生活の安定向上を図るとともに地域経済の発展に寄与する。」という目的のもとに、県並に県農協中央会、郡内町村会等の協力により「宗像地区農協合併推進協議会」（会長上田千吉福岡農協長）を発足、鋭意合併に関する諸事項を検討々議、又、各農協に於いても総会、役員会等で協議を重ね、五十一年末に「合併仮調印式」が行なわれた。

当初五農協合併は、五十二年四月と決定し、各農協毎に合併手続を行っていたが、種々事情が発生し延期となっていた、各農協長・役員再度協議の結果、本年七月合併との合意に達し、その調印式を往古より「神郡宗像」の鎮守として、広く厚く郡民より崇拝されている宗像大社神前で行うこととなった次第である。

尚、五農協合併による新構成は左記の通りである（五十年度末）

項目 ／ 農協名	正組合員数（50年度末）	（50年度末）職員数	（50年度センサス）農家世帯	（50年度センサス）総耕地面積
宗像町農業協同組合	人 2,068	人 140	世帯 1,632	ha 2,310
福間町農業協同組合	1,231	63	749	967
津屋崎町農業協同組合	671	57	662	888
玄海町農業協同組合	1,170	64	770	1,060
大島村農業協同組合	284	8	120	114
合計	5,424	332	3,933	5,339

出光興産（株）門司油槽所鎮座 宗像神社春祭り斎行



去る五月十六日午前十一時、出光興産（株）門司油槽所（北九州市門司区新門司二丁目）の構内庭園に鎮座する、宗像神社春祭りが楠本祢宜外職員二名、恒見八幡神社（地元鎮守）宮司、石川正直氏奉仕により厳粛に斎行された。

祭典には出光興産（株）門司支店、内田澄支店長、同門司油槽所大川哲夫所長以下所員多数、又同油槽所内関連企業各社の代表、社員も多数参列する中、斎主祝詞奏上、玉串拝礼後、内田支店長、大川所長、各社代表の玉串奉奠が行なわれ式次第も滞りなく終了した。引続き神前に於て参列者一同神酒拝戴、直会が行なわれた。

出光興産（株）門司油槽所は昭和四十二年、新門司臨海工業団地進出開所以来、着々と機能整備を推進、昭和五十二年三月、潤滑油装置設備の竣工始動により第一期工事の完成を見た。この間、昭和五十一年事務所の建設と共に構内に当大社の御分霊を奉斎する社殿建立も同時に計画、本年初頭には鎮座奉祝祭が斎行され、同三月には新社殿神前に於て潤滑油装置安全祈願祭も斎行された。

尚、同油槽所は第一期工事の完工により潤滑油部門の西日本地区の中心基地として一段の飛躍が期待されている。

文化財保護審議会 会長田中義男氏外参拝

――当大社文化財視察――

去る五月十九日（木）、文化財保護審議会委員（田中義男会長）一行十名が福岡県教育庁文化課藤井功課長の案内で当大社に参拝、境内、宝物館等を見学された。

文化財保護審議会は、田中会長（元文部事務次官）以下、谷口吉郎（建築学）、坂本太郎（東大名誉教授、古代史）、井上靖（作家、古代東洋）、松下隆章（京都国立博物館々長、考古学）の各界の専門家五人で構成されている。

今回の来福は、古代日本における外国文化の門戸として栄えた、〝宗像〟・〝太宰府〟を中心に文化財の保護状況の実態調査を行ったものである。

当大社宝物館は周知の如く、沖津宮古代祭祀遺跡出土神宝、社伝神宝等多数の国宝、重要文化財を有している。そのほとんどが大陸からの渡来品か、あるいはその影響を受けたものである。

その内の数品を列挙すると、

一、鏡　鑑（中国漢・三国時代）四十九面
一、馬　具（朝鮮新羅時代）杏葉、雲珠類
一、金指環（朝鮮新羅時代）
一、龍　頭（仝　右　）
一、唐三彩（中国唐時代）
一、瑠璃碗（ササン朝ペルシャ）
一、石造狛犬（中国宋時代）
一、阿弥陀経石（仝　右　）

等々これらの文化財をつぶさに調査された各委員は、宗像の地の歴史的重要性を再認識された。

あくる二十日は、平安朝以降〝遠の朝廷〟として栄えた、太宰府を訪問、太宰府政庁跡、観世音寺、九州歴史資料館、太宰府天満宮の視察を行われた。

話題の新車をみる (二七)

ランサー一二〇〇 MCA－JETの巻

昭和四十五年、アメリカの所謂マスキー法が提唱されており、七年足らずで、日本の規制が途中からアメリカを追越す形になり、ようやく最終目標に到達した。

すなわち三菱自動車は、この程〝新オリオンエンジン〟を塔載した、五三年規制適合車「ランサー一二〇〇MCA－JET（噴流制御超稀薄燃焼方式）を発売した。

これは、吸入バルブからの混合気の流入と同時に、主役を掌る第三のバルブたるジェットバルブから音速を起える勢いでスーパーリーン（超希薄）混合気、又は空気を燃焼室に送り込み、このジェット流がまずプラグ付近をフレッシュアップし、更に混合気を渦状に掻き混ぜて着火をスムーズになす画期的な燃焼方式。特長は、①副燃焼室を用いることもなく、点火時期を遅らせることもなく発生源でクリーンにしてしまう。しかもガス対策車では考えられない②低燃費を実現一三Km／ℓ（六〇Km／h定地走行値、SL6・スタンダード）、そして市街地走行など実用的な③出力性能の向上（最高出力－七〇PS／五五〇〇rPm）と市街地走行での追い越しで、④胸の空く走行感覚を実現した（最大トルク一〇、七Kgm／三〇〇〇rPm）。

扱て、車種および諸元としてSL－6（2ドア・4ドア）GL（2ドア・4ドア）ポピレール（2ドア・4ドア）スタンダード（2ドア）。

内装に関しては、高さを三五ミリも調節できる①チルトハンドル②一六五ミリスライド付フルリクライニングシート（SDは可倒式）③一本のレバーにターンシグナル・ディマ・ワイパ・ウインドウオッシャ・パッシングの5機能を集めたマルチユースレバーにて使い易さを確保している。

また④ワンタッチで装着できる3点式シートベルト（自立式バックル付）⑤ワイドなトランクルームを採用。⑥ハンドルの切れ角によってギヤ比が変わるバリアブルレシオギヤを全車に採用し、高速直進時にはハンドルが安定し、低速時には軽く滑らかにする。⑦万一の場合にショックを柔らかく吸収するコラプシブルステアリングを採用⑧車室をガッシリと守る衝撃吸収モノコックボデーを採用。

ブレーキシステムとしては、SL5・GLの前輪は、高速走行や雨天時に制動力を発揮するディスクブレーキ（尻ふりを防ぐPCV付）、ポピュラーとスタンダードには信頼性の高いツーリーディングを。更に後輪は全車リーディングトレーリング（アジャスタ付）を採用して安全性を確保している。

第五回 天満宮親善野球

恒例の太宰府天満宮との親善野球大会が六月一日午後三時、宗像の地、厚生年金球場で行われた。

はやいもので今年は五回を迎え過去二勝一敗一引分けと宗像大社が勝ち越してはいるものの、毎年僅差の試合を展開、今年は天候に恵まれ、青空高く公式野球審判員の右手が大きく上がり、天満宮チーム先攻で試合が始められた。

初回天満宮一点を先取、宗像二回に一点をかえしてタイスコアーとしたが、四回我が大社チームは失策が続出し四点を献上、六、七回と一点を加点された。

一方大社チームは毎回の如く天満宮上野権祢宜投手を攻め塁上を賑わすがあと一歩の攻めが出ず、残塁を操返した。結局二回、六回に各一点を上げたに留まり、七対二のスコアーでもって本年度は天満宮チームが勝利を納めた。

終了後場所を五月寮に移し、懇親会が催された。

養父祢宜大社チーム監督が両チームの健闘を称え、天満宮三田祢宜監督おはこの博多にわか等が披露され和やかなうちに散会した。

（寄稿）宗像大社とスポーツ

――どんぐりテニスクラブ――

どんぐりテニスクラブが宗像の地にうぶ声をあげて一年半。やがて緑の大樹に育つことを夢みて、十二人の〝精鋭〟は連日練習に励んでいる。

宗像郡町村長会事務局のおなかの出っ張りが気になる〝青年〟局長を会長に、『日焼けすると売れなくなる』と気にする色白のお嬢さん、教育庁宗像出張所の鼻息の荒い若武者、福銀宗像支店の二人の独身のお嬢さん（年齢には距りがあるが二人とも法律上の独身）に加えて殺ばっとした職場環境で惰眠をむさぼる新聞記者がメンバーのプロフイル（この他にも宴会にだけは必ず顔を出すナゼか義理がたい小学校の教頭センセイもいるにはいるが）。

〝前途多難〟を思わせる鴉合の集りではあるが、どうにか今日までトラブルもなく続いてきたのは会員相互の理解と協力もあるが、何よりも一番の原動力になったのはスタートから恵まれた環境にあったことではなかろうか。

『テニスはやりたい』という人はたくさんいる。が、一人ではやれないし、第一コートがなくては長続きしない。環境に恵まれないため何も出来ないでいるテニス愛好家は多いだろう。わがどんぐりテニスクラブにしても、テニスコートの問題は最初から一番の問題でもあったし悩みだった。しかし、幸いにして宗像大社第二、第三宮横のテニスコートを大社の好意で借りることが出来た。どんぐりテニスクラブがこうしてフランチャイズを持つことがなければ、スポーツ施設が貧困な宗像郡では、とっくの昔に空中分解していただろう。

ただコートは玄海町テニスクラブと交代で使用しているため、お互い気持よく練習できるようにコートの手入れは十分気をつけているつもりだ。とにかく、こうしてどんぐりテニスクラブと宗像大社のふれあいは続いている。一同よろしくお願いします。

昭和五十一年度 会計監査・責任役員会開催

昭和五十一年度の当大社々費・氏子会々費の会計監査並に責任役員会が去る五月十七日・六月二日の午前十時より開催された。

五月十七日の会計監査は当大社斎館に於いて、社費（社務本局、海洋分局、文化財管理事務局の各費）・氏子会々費とに分けられ、社費の監査は、中村清之・立石昇・河野幸人（以上責任役員）の三氏により、又、氏子会費は黒石雅資（玄海）、吉田寿夫（宗像）、脇野十郎（福間）、谷口勇（津屋崎）以上四氏の氏子会監事に依って、厳正に歳入歳出の監査が行なわれ、双方共に、書類、簿冊等に異状なく結構であると円満に承認された。

六月二月の責任役員会は当大社会議室に於いて開催された。当日は、出光佐三、中村清之、立石昇、河野幸人、籠島忠吉、大森武雄以上六氏と当大社より葦津宮司以下関係職員八名出席の下で進行された。

先づ開催に当り葦津宮司の挨拶が行なわれ、引続いて議題に入った。先に行なわれた会計監査の結果報告が河野幸入役員より述べられ一同了承。又各項目別に順次詳細に審議がなされ決算及び諸案件は原案通り承認可決された。

【新任職員紹介】

権祢宜　高向正秀（27才）

新任職員を紹介いたします。今後共宜しく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

「たかむく・まさひで」昭和二十四年六月、門司市（現在の北九州市門司区）で誕生、もと／＼高向家は玄海町田島で代々居を構えていた、父君は教育者として永年北九州方面で教職につかれ停年を期に郷里に帰へられた。祖先は宗像大宮司家に仕え当大社の社家として非常に縁の深い関係にある。

同君は県立宗像高校から皇學館大学文学部（伊勢市）へ進学、昭和四十八年卒業、同時に神明奉仕の道を選び伊勢神宮に奉職、本年三月退職、同四月祖先代々縁のある宗像大社へ奉職、祭務部祭儀課職員として神明奉仕に日夜精進している。

趣味はスポーツ、特にテニスは高校時代県体に郡代表として出場するなど郡内テニス界のホープとして活躍、数々の優秀なる戦績を納めている。同君の奉職、帰郷に依り当大社テニス同好会並に郡内テニス界では一段のレベルアップが期待されている。

性格は明朗活発、質実剛健、容姿端麗の好青年である。現在は母親、弟との三人家族で同家の大黒柱として家庭に仕事に励み、目下良き花嫁を探がしている。

現住所　宗像郡玄海町神湊

宗像大社歌会 俳句作品集（一七三）

上穴　八尋　恒夫
我が内も幟り建てたき若夫婦

藤沢市　玄　洋子
青空に揃いて泳ぐ鯉のぼり

津屋崎　浜津　鴻浪
藤の花ゆれる寂しい部屋となる
藤咲けりまといし霧の雫して

福間　広渡一寸毛
新緑の高良の宮居若葉寒
五月雨やきんめい竹ののび早し

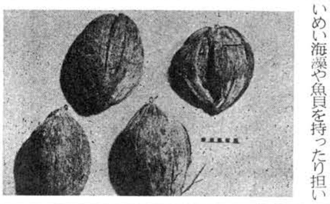
田熊　力丸　一郎
つつじ燃え訪ふ人は居ずさとの家

田島　有吉　唐水
八ツ手の葉ゆれて蛙の声に和す

宗像　岡田　無名
祈願車の並ぶ大社や五月晴

浜の寄物 ㈠
最古の寄物と海の幸
いしいただし

今からおよそ五千年前の春。玄海から遠く離れた太平洋側は千葉県銚子の浜。吹き荒れた風もやっとおさまり、浜では数人の男女が出て、打ち上げられている魚や貝を拾っていた。一人の男が奇妙な物を見つけた。直径三〇センチ、茶褐色をした楕円形でなにかの実らしい。表面のところどころに、海藻やエボシガイが付着している。水分を含んでいるためにずっしりと重い。持ち上げて振ってみたら、ゴロゴロと音がする。男は持ってきた網袋の中に、貝や魚とともにこの実も入れた。彼等はめいめい海藻や魚貝を持ったり担いだりして、砂丘のむこうにある部落へ帰っていった。男は竪穴住居のわが家へかえると、網袋の中から、さきほど拾った実をまっさきに取り出すと、石のナイフで繊維質の部分を剥いだ。中には堅い殻（内果皮）があり、音はそこからする。再び堅い殻を石器で擦い切っていた。すごく堅かったが、石の斧（おの）を作る作業に比べるとはるかに楽であった。半分に擦り切ると、黒褐色の塊がでてきた。プーンと油濃い匂いが漂い、腐っていることが分った。中のものは男が期待していたようには食べられなかったが、折角苦労して半分に割ったものだ。男は容器として使うことに決めた。軽くて土器よりも丈夫そうである。この楕円形の実は「椰子の実」である。



――昭和五十年、銚子市南小川町の粟島台遺跡と呼ばれる縄文時代中期の泥炭層から、小さな椰子の容器が発掘されたことを、玉の研究で知られる寺村光晴先生（和洋女子大学教授）から伺い、私は椰子のことを、このように想像したのである。銚子の沖にはフイリピンルソン東沿海に源を発した黒潮が、日本列島に沿って北上（黒潮は奄美大島の北西方で分れ対島暖流となる）している。恐らくこの椰子はフイリピンあたりから流れ出たものが、黒潮に乗って、銚子の浜へ流れついたものであろう。

名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ…漂着として確実な、しかも最古の記録の一つといえよう。椰子のことは後で詳しく述べることにして、五十年ほど前の縄文人も、浜へ出て寄物に注意を払っていたということが想像される。

浜の寄物にはそれほどに魅力があるものだろうか。まず「海の幸」からみてみよう。玄海沿岸には「浜ばしり」とか「灘ばしり」という言葉がある。

『冬がくれば、よく父や母から浜ばしりをしてこい、早ようないかんと拾いそこなうバイといわれたもんです。「ひょうひょう」とか「どうもこうも」と呼んでいるネルで作られた円筒状のものをすっぽりと被り、顔だけを出して千切れるような冬の寒さの浜を歩いたもんです。海の荒れた日にはイカや貝を拾いました』と古賀の老人達は懐かしそうに目を輝やかせて、昔を語るのである。

海の魅力は、例えば縄文人が拾った椰子のように全く思いがけない偶然性の面白さと、北西の季節風が吹く頃になるときまって約束されたように打ち上げられるものとがあった。冬の浜ばしりや灘ばしりは、後者であるが、私は実際にどれだけのものが上げられるのか、海岸を歩き記録にとってみた。これは昭和四十八年の十月から十一月にかけてのものである。場所は粕屋郡古賀町花見から宗像郡福間町花見の間、約一・四キロの距離。（数字が拾った数）

十月二十二日マハタ（シマアラ）一、二十三日ウスバハギ五、二十四日ウスバハギ三、十一月六日ウマズラハギ二、七日ウスバハギ五、十一日、ウマズラハギ一、コウイカ一、十二日ウマズラハギ一、十八日ウマズラハギ一、十九日ウスバハギ十、二十日ウスバハギ一、」というような生魚が打ちあげられる。これは私以外にも海岸を歩いて拾っているので実数はもっと多いであろう。カワハギは時折り大量で打ちあがることもある。昭和四十六年十一月、当時の新聞を見ると次のように記されている。

『福岡県宗像郡玄海町では七日午後一時ごろから岸に打寄せられ始めた。魚は申合わせたようにウマズラハギばかり。時間がたつにつれて数を増し、夕方には浜のいたるところで体長二十センチから三十センチほどのがピチピチ、住民や日曜ドライブのマイカー族がこれに気づいて大騒ぎとなった。腹を上にして打寄せられる魚をつかみ取りで二、三十分の間に持ちきれないほどの収獲』（朝日十一月八日付）

（つづく）

西日本新聞社刊、滝口凡夫著「創造と可能への挑戦」は五月号をもって終了しました。出光佐三氏の事業理念を詳細に述べたこの論稿は多くの読者に深い感銘を与えたことと思います。また今月号からこの欄には「浜の寄物」と題しまして県立養護学校教諭石井忠氏の玄海灘の漂流物の研究を連載いたします。

"宗像大社の成立年代について近代科学的に調査"
――真鍋大覚博士（九州大学工学部）――

吾が国の古代社会に近代科学の光をあて、古典研究に新分野を開拓されている九州大学工学部航空工学科真鍋大覚博士が、去る四月四日当社を訪れた。

博士は参拝后、本殿の位置等を詳しく調査され、その結果をこの程次のように本紙に寄せられた。

◇

貴社、御神殿の御造営につきまして当日測定致しました結果を御報告申し上げます。

磁石にて御神殿の方向をNと致しますと磁針は左方Wに三一・〇度を指しました。宗像では北極星の方向は磁針の北から右方六・一度でありますから御神殿は南面より東へ三七・一度傾いていることになります。

もし神代の頃の式例として、神殿を夏至の日の出或は冬至の日の入を境内で氏子に誰にでも見分けられる様に定めてあったと考えますと、その方位は宗像の地で平均二九・〇度となりますから三七・一度−二九・〇度＝八・一度は長い歳月の間に九州島が水母水月の如く浮き漂ったことになります。

そこで、この自転速度でありますが三三四・九年／度の値が筥崎宮参道の方位から算出されました。

御承知の如く筥崎宮では夏至の日に玄界灘に沈む落日を御神鏡に映す夕陽儀が行なわれておりました。境内は天文十五（一五四六）年の御造営でありますが今は六月二二日十九時三二分にまいりますと夕日は鳥居の右方一・二八六九五度の方向に沈んでおります。

これから（一九七七−一五四六）÷一・二八六九五度＝三三四・九年／度となります。従って宗像大社の場合は八・一度×三三四・九年／度＝二七一二・六九年前、即ちBC七三六年前となります。この年は冬至が朔日となって暦元となりますから、何か御由緒があったかも知れません。記紀に見える海幸山幸の津浪の物語はBC七二三年であります。従って一時津浪の水難を避けて山上に遷座になったのかも知れません。なお御参考迄に宗像の貝塚年代は浜宮でAD七四年、上八でBC一八二八年となっておりますから、かなり古い時代、今から二〜三千年前には祭祀が普及しておったものと思われます。

もし御神殿が夏至朔日或は朔日に合わせてありましたならば日の出方位は二八・七度でありますから（三七・一度−二八・七度）×三三四・九年／度＝二八一三・一六年前、即ちBC八三七年となります。これを基礎にしまして、その前後数年間を捜しますと夏至が新月となる年はBC八四三年、満月となる年はBC八三八年となります。

この頃は、日本書紀の年代から逆算してほぼ神武天皇より五代前の頃と推定されてまいります。なお日本書紀巻三神武紀、日向御出発の記事にあります一七九萬二四七〇歳余の数はBC六七九年の冬至朔日を基準にしてあるものと思われます。大隅吾平山陵はこれに拠っております。もしこれを暦元として遡りますと、八推一五二歳前のBC八三一年という値も何かの由来を語ることになるかも知れません。

以上

◇五月　社務日誌◇

一　日
沖・中両宮春季大祭　午前九時
辺津宮月次祭　午前十時

三　日
竜宮祭（筑前大島）　午前十時

四　日
玄海幼稚園々児一五〇名、子供祭斎行　午前十時

五　日
浜宮祭・五月祭斎行　午前十時

六　日
宗像大宮司氏貞公墓前祭

七　日
国学院大学事務局長高藤昇氏参拝

九　日
臼杵運送（株）宗像神社月次祭
九州神道青年会総会（於、筥崎宮参集殿）　職員五名出席

十　日
日光東照宮宮司額賀大興氏参拝
沖縄県神社庁庁長吉田玄蕃氏並に識名宮宮司国頭正明氏参拝
鏡神社（唐津市）総代十二名参拝
九州神職連合総会（於筥崎宮参集殿）葦津宮司以下四名出席、
玄海町成人学級菊部会開催（於斎館）　午後一時

十三日
福岡県警々察本部長鈴木金太郎氏参拝

十五日
月次祭　午前十時

十六日
出光興産（株）門司油槽所内、宗像神社春祭斎行　午前十一時

十七日
宗像郡農協合併仮調印式並奉告祭（於清明殿）　午前十時
昭和五十一年度会計監査（於斎館）

十八日
風俗舞保存会設立準備委員会開催（於斎館）　午後三時
宗像郡記者クラブ懇親会（於五月寮）　午後七時
東京出光会二十四名参拝

十九　日
宗像郡氏子総代会（於五月寮）
香椎宮宮司木下祝夫氏、九州大学真鍋大覚博士参拝
文部省文化財審議会十名参拝

二十一日
宗像大社定例歌会「互選会」開催（於斎館毎月第三土曜日、午後一時より）

二十六日
宗像郡郷土芸能振興会開催（於斎館）
出光興産（株）社長大和勝氏外六名参拝

二十七日
沖津宮現地大祭斎行　午前十時

二十九日
県小学校々長会十五名参拝

「年中人事」

著袴（はかまぎ）

幼児三才から七才の間に行われるもので、嬰児から幼年期に達した式である。嬰児の男女性別が明瞭でなかったものが、被服の上でその区分が明らかにされるので、男児としての出発点といえる。すなわち男子の袴、女子の裳が服飾上の古い男女の区別で、この区分の中に入ったことを示すもので、平安時代の末に男児は直衣（のうし）をつける式や、小袖に下袴をはく例になった。袴の腰紐を結ぶ者は、加冠（元服）の場合と同じく、親戚の中の尊貴の者を選んだ。鎌倉時代以後武家でもこの式は行われたが、この場合は武家の盛装である直垂（ひたたれ）が用いられた。しかし江戸時代には武家も庶民も麻裃を用いることになり、式の後饗宴が催されたり、産土神に参詣したりした。女子の場合にも平安時代末からしん細家では著袴のことが行われたが、これは成人式の裳着（もぎ）と区別さるべきであった。これは平安時代末から一般に着裳形式がなくなって張袴が主体となった著裳形式のための混乱からであった。

男女幼児は二、三才で「かみおき」（またはかみたて・くしおきなどともいう）といって髪をそぎ、将来の生髪を祝するが、この儀式のときに幼児を碁盤の上に立たせ、鴨川の石をふませ、これから飛び降りさせる風習があったが、これが近世に丁度著袴と同時期に行われたため、著袴のときにこの風習が結びついてしまったのである。

烏帽子親（えぼしおや）

武家の男子が成人したしるしに行う元服（げんぷく）に、烏帽子を援ける役で、公家の場合の加冠の役に相当する。この役に請ぜられるのは、身分高く、栄誉に富む人物に限られていて、一門の長者または臣下であっても高位の者が選ばれた。例えば鎌倉時代の将軍の元服には北条氏、室町時代の将軍の元服には管領家、江戸時代には彦根藩主井伊家・会津藩主松平家がそれぞれ加冠（烏帽子親）・理髪の役に当った。

婚姻（こんいん）

男女の永続的な生活結合の意図で、男子方から求婚することによって婚姻は成立する。「古事記」に伊邪那岐・伊邪那美の二神が男女神として出現して、八尋殿に天の御柱をたて、これを左右から行きめぐり、女神が先ず初めに「愛わしき男よ」といい、次いで男神が「愛わしき女よ」と呼び合って婚したが、その結果は流産という国産みの目的にかなわない結果が生じ、改めて、男神が先ず口を開き、次いで女神がこれに応じた。その結果国産みの目的を達したというのは、婚姻が男子からの求婚によって始められるという基本的な観念と社会事情が古く成立していたからである。

この神話の中に含まれている家・柱・会合・呼びかけなどいうものが婚姻のいろいろの要素を暗示している。すなわち家は結婚の場所（くみど）及びその住居（すみか）の問題を、柱は歌垣などの形式にも見られるように、一定の境において男女が相会する風習を、呼びかけは「つままぎ」における男女の問答・応酬などで、これらは大和朝廷を中心とする婚姻風俗としてながく平安時代まで何らかの形で残った。家を基点としては聟入りと嫁入りとの二つの形式に分けられるが、聟入りは男が女の家に行って婚し、ある期間を経て女を男の家に入れるか、別家を建てて住まわせるかする方法で、平安時代にその典型的なものが見られ、嫁入りは初め男子が女の家で婚した後男子方にくることを意味したが、後には男子の求婚―（媒人）―承諾―入輿の形式をとった。

これは大和朝廷成立後の宮廷の婚礼形式であり、男子がたとえ女子の家に通っても、婚礼の式は男子の家で行われたのである。この形式的な嫁入は、さらに鎌倉時代以後一般化した。

以下次号に続きます。